

所知障の研究

——不染汚無知の内容——

佐々木 宣祐

序

唯識学派の独自課題である「所知障」の解明が本研究の目的である。これは唯識学派が、所知障とは「不染汚無知」(akliṣṭājñāna)であると示すのが手がかりとなる¹⁾。この不染汚無知とは『婆沙論』からはじまる比較的新しい概念で、仏陀と他の三乗等とに差異を立てるのに用いられる。すなわち仏陀のみが不染汚無知を克服していて、他の者たちは、たとえ阿羅漢位であろうともこの不染汚無知は克服できていないと『婆沙論』は言うのである。「不染汚」と言うように、これは染汚の煩悩のようなものではなく、またそのため修道上の課題ともされない。あくまで仏陀と、阿羅漢たちとの間に立てられた智の差としてある²⁾。

ではこの不染汚無知とはどのようなことを内容としているのか。本稿では不染汚無知初出の『婆沙論』を中心にして、この問題を見てみたい。

1. 『婆沙論』の不染汚無知内容

『婆沙論』中には不染汚無知に関する議論が6箇所あるが、その内容を整理すれば3つに区分できる。

第1は一切法に関する無知である。巻176では次のように説明されている³⁾。

一切染汚不染汚痴皆永断故。覺了一切勝義世俗諸爾焰故。復能覺悟無量有情。随根欲性作饒益故。由如是等覺義勝故。名為仏陀。不名菩薩⁴⁾。

ここでは一切の勝義と世俗の対象(爾焰)に明らかなのを不染汚無知なしとしている。また巻15や巻74では一切の名や十二処に対する完全な智を不染汚無知なしとしている⁵⁾。これら是一切法に関する無知をその内容として考えている。

第2は煩悩の習気である。巻9には次のようにある。

不染汚者。声聞独覺雖能断尽而猶現行。唯有如来畢竟不起。煩惱習気俱永断故。由此独称正等覺者⁶⁾。

ここでは不染汚無知を染汚の習気と考えている。

第3は第1の一切法と第2の習気の両者を内容とするものである。巻16には次のようにある。

謂仏世尊愛悲永断，違順平等。拔諍論根，滅憍慢本。視諸珍宝猶如瓦礫。於一切法覺照無遺，無相似愛及悲慢等。諸煩惱習已永断故，非如独覺及諸声聞，雖断煩惱而有余習⁷⁾。

『婆沙論』ではここだけであるが、『俱舍論』等にはこの内容で継承されている⁸⁾。

さて、第1の一切法に関する無知は、不染汚無知がしばしば仏陀の一切智と対比されることから理解は容易い⁹⁾。だが第2の煩惱の習気はどうか。不染汚無知は不染汚であることから、新しく加えられても修道体系には何らの影響もあたえていない。それなのに何故煩惱のような染汚性を不染汚無知の内容としたのであろうか。また第3のように一切法と習気があげられている場合には、両者の関係をどう理解したらいいのだろうか。

2. 一切智と三明の関係

不染汚無知の初出は『婆沙論』である。それ以前には類する概念も見当たらない。ではこの内容はどこからきたのか。その点を不染汚無知の対概念ともいえる一切智を手がかりにして解明してみたい。

一切智はニカーヤの時代からすでに見られるが、一切智に関して活発な議論がなされるのはやはり不染汚無知と同じく『婆沙論』からである¹⁰⁾。その点からも不染汚無知と一切智が関連していることがわかる。しかしニカーヤに一切智に関する議論が全くないわけではない。

『中部』の「テーヴィッチャ ヴァッチャゴータ」には、ヴァッチャ姓の者が「世尊を一切智者と呼んでもよいのか」と質問し、釈尊が次のように答えている。

〔世尊は仰せられた〕「ヴァッチャよ、彼らはこのように言っている。“沙門ゴータマは、一切智者一切見者であり、完全な智見あると称している。我が歩む時や留まる時、寝ている時や寝ていない時には、常に不斷に智見が起っている”と。〔このように〕私に関してそれらのことを言う者は、事実ではない偽りをもって私を誇っている。」（中略）「ヴァッチャよ、“沙門ゴータマは三明ある者である”と、説き語る者は、我に関して我を偽りをもって誇らず、法に関して法にかなって説くであろう。」（中略）

①「ヴァッチャよ、何故なら私は望むだけで、種々の以前の住した所を憶念できる。あたかも一つめの生を二つめの生を……と、〔その時の〕様相と境遇と、種々の以前に住した所を思い起こすことができる。」②「ヴァッチャよ、何故なら私は望むだけで、清らかな常人をこえた天の眼によって、衆生の死んでいく者達を、再生してくる者達を見

ることができる。劣った者と勝れた者を、美しい者と醜い者を、幸福な者と不幸な者とを……〔そのように〕業に順った衆生をよく知ることができる。」③「ヴァッチャよ、何故なら私は諸々の有漏を尽くしたため、現在に於いて無漏の心解脱・慧解脱を、自ら証知し、真になし、到達して住んでいる。」¹¹⁾

この経典は一見釈尊が一切智者を否定しているようだが、「sabbaññāna」の名称を誡め、「tevijja」―「三明ある者」と一切智者を言い換えているにすぎない¹²⁾。またこの三明は仏陀の正覚の智としてもよく語られる¹³⁾。そのため一切智が三明で捉えられていると考えられるのである。

三明とは①の宿命智通、②の天眼智通、③の漏尽智通である。説かれているように①の宿命智通は過去の事柄を知る智であり、②の天眼智通は未来の事柄を知る智である。そのため過去から未来にわたるあらゆる事柄を知る智であると言える。そして③の漏尽智通は煩惱を離れた智である。

ではこれら三明が一切智の内容であるなら、先の不染汚無知の内容と対応してくることに気付く。すなわち宿命・天眼の2つは、時間をこえて余す所なく知ることができるため、一切法に関する無知を離れていると理解できる。また漏尽智通は煩惱から完全に離れているため、習気をも離れていると了解できる。したがって一切智の内容が三明であることから、『婆沙論』はその逆の不染汚無知に、一切法に関する無知と煩惱の習気の2つの内容を与えたと推測できる。

3. 『婆沙論』の三明に関する差異

不染汚無知の内容を三明との関係で確かめた。しかし三明は仏陀のみの智ではなく阿羅漢たちも有している。この問題を『婆沙論』はどのように見ているのだろうか。これに関しての議論がある。

問何故如来身中有〔神通〕智立為力，声聞独覺身中諸智皆不立為力耶。答不可屈伏無障礙義，是力義。声聞独覺身中諸智，猶為無知屈伏，及有障礙故，不名力¹⁴⁾。

『婆沙論』は「力」の語によって神通に差異を立てようとする。力の語は仏陀側からであるが、阿羅漢たちの側からすれば無知の語となっている。この無知は議論の趣旨から不染汚無知を指すと考えて差し支えない。そのためこの議論は不染汚無知に関した議論と同質であると考えられる。これはこの後に行う智の検証が、一切智と関連する三明によってなされることから裏付けされる。検証は宿命・天眼・漏尽の順でなされる。

曾聞。仏与尊者舍利子一処經行。有一有情来詣彼所。仏告舍利子。汝可觀此有情過去，

曾於何處為汝親友。時舍利子，以初靜慮，乃至以第四靜慮，宿住隨念智觀之，皆不能見。便從定起而白仏言。我之定力觀不能見。仏告舍利子。如有情，曾於過去爾所劫前為汝親友。彼時既遠，非諸聲聞獨覺境界故汝不知¹⁵⁾。

先ず宿命智通に関しての説話を提示している。この時仏陀と対比されるのは舍利弗である。舍利弗は智慧第一と仏陀より認められているが、その舍利弗の智であっても隔たった過去に関しては完全には知り得ないとしている。

仏又一時与舍利子一處經行。時有一人遇緣而死。仏告舍利子。汝應觀彼當生何處。(中略) 仏告舍利子。此人命終生某世界。彼處既遠，非諸聲聞獨覺境界故汝不知¹⁶⁾。

次に天眼智通に関する説話である。これも先と同じく舍利弗と対比される。天眼は未来に関する智であるが、舍利弗でも知り得ない未来があるとしている。

問三乘漏盡既無差別。何故漏盡智二乘非力耶。答仏漏盡智勝妙猛利，非諸聲聞獨覺所及。(中略) 又二乘智雖能盡漏，有余習故不名為力¹⁷⁾。

最後は漏盡智通である。ここは説話ではなく議論で差異を明らかにしている。注目すべきは差異の根拠として習気が言われている点である。これは不染汚無知が習気を内容とするのとは一致するため、不染汚無知が漏盡智通と関係すると改めて指摘できる。

このように『婆沙論』では三明についても不染汚無知と同じく仏陀と阿羅漢達とに差異を立てている。そのためこれらの議論は、一切智である三明の面から示した不染汚無知説とも言い得る¹⁸⁾。

結

不染汚無知説の内容は、ある時は一切法に関する無知、ある時は煩惱の習気、そしてある時はその両者で示されていると整理できる。では何故これらが不染汚無知の内容となるのか。その点はニカーヤの一切智と三明に関わる教説から確かめられる。三明は仏陀の正覚における智として早くから説かれていた。そこから三明で一切智が説かれ、それに基づいて『婆沙論』は不染汚無知の内容を一切法の無知または習気として示したと説明できる。このことは『婆沙論』自身が三明の議論において、仏陀とそれ以外の者とを無知と習気で差異を立てることからも裏付けできる。

この確かめは、唯識学派が不染汚無知なる所知障は一切智を獲得する問題であるとの主張を、伝統仏教側の『婆沙論』から明らかにできたことといえる¹⁹⁾。

-
- 1) Tbh., p.15 等. 2) Cf. 佐々木 [2011-1, -2]. 3) 他は卷 15, T27, p.74a, 卷 74, pp.382c-383a, 卷 143, p.735b. 4) T27, p.887b. 5) T27, p.74a, pp.382c-383a. 6) T27, p.42bc. 7) T27, p.77a. 8) 『俱舍論』では、再び起る性質（習気）で、場所・時間・諸事における不染汚無知とある。『順正理論』もほぼ同様。Akhh., p.1, T29, pp.501c-502a. 9) 卷 15 と卷 143 は仏陀と三乗の差異を一切智と不染汚無知によって分けている。 10) Cf. 佐々木 [2011-2] pp.40-41. 11) MN.1, Tevijja-vacchagotta-suttanta, pp.482-483. 12) Cf. 佐々木 [2011-2] p.62-No.13; 川崎 [1992] pp.63-65, pp.72-76. 13) MN.1, Bhayabherava-sutta, pp.22-23, Mahāsaccaka-sutta, pp.247-249. 14) T27, p.530c. 15) T27, p.530c. 16) T27, pp.530c-531a. 17) T27, pp.530c-531a. 18) 『俱舍論』にも仏の不共法について同様の議論がある。Akhh., pp.412-413. 19) Tbh., p.15.

〈文献略号〉

Akhh.: P.Pradhan, ed., *Abhidharma-koshabhāṣya of Vasubandhu*, Tibetan Sanskrit Works Series, vol.VIII, K.P.Jayaswal Research Institute, Patna, 1967. **MN.1**: V.Trenckner, ed., *Majjhima-Nikāya*, vol.I, PTS, London, 1888. **Tbh.**: Sylvain Lévi, ed., *Vijñaptimātratāsiddhi, deux traités de Vasubandhu, Viṃśatikā Accompagnée d'une explication en prose et Trīṃśikā avec le commentaire de Sthiramati*, Paris, 1925. **T**: 大正新脩大藏經。川崎 [1992]: 川崎信定『一切智思想の研究』春秋社, 1992. 佐々木 [2011-1]: 「所知障の研究—『婆沙論』の不染汚無知説—」『印度学仏教学研究』60 卷 1 号, 2011; [2011-2] 「所知障の研究—一切智者と不染汚無知説—」『大谷大学大学院研究紀要』28 号, 2011.

〈キーワード〉 所知障, 不染汚無知, 一切智, 三明

(大谷大学大学院)